

地域アイデンティティ形成と仲間づくり — 北海道新得町レディースファームスクールの事例を通して —

内 田 弘*

目 次

1. はじめに	17
2. 対象と方法	18
3. 新得町の概況	20
(1) 農業生産の動向	20
(2) 農業従事者数と後継者数の変化	22
4. 新得町立レディースファームスクールの概要およびミルクネットについて	24
5. レディースファームスクールにおける研修生の地域アイデンティティの形成	24
(1) ミルクネットの形成の経緯—仲間意識の形成との関わりで—	25
(2) 新得町社会へのアイデンティティ形成	27
(3) 新得町における地域のアイデンティティ形成	30
1) 研修生相互の学習の形成	30
2) 地域住民と研修生の相互学習の形成 —主として研修生に対する地域住民のまなざしに注目して—	31
6. まとめ	32
参考文献	33

1. はじめに

本稿は移住してきた若者を対象とした地域の担い手育成実践の学習・教育論の視点からの検討を行うことを目的としている。人口減少社会の中、特にどのようにしたら若者を地域に呼び込み活躍してもらえるかということが大きな社会的な課題となっている。社会教育の分野でもそうした現状に呼応して若者を地域で受け入れ地域の担い手になってもらうための教育・学習実践のあり方が重要なテーマとなりつつある。

* 博士後期課程3年

このような意味で地域の担い手育成実践の学習・教育の課題とは、まず何よりも移住してきた若者が地域への愛着と住み続けようとする気持ちをいかに形成するかということではないだろうか。地域おこし協力隊に関する研究においても、3年の任期が切れた後、いかに地域おこし協力隊として赴任してきた若者に定住してもらうかということが大きな課題とされていたのである。例えば図司は、協力隊の若者たちをいかにしたら「定着させる・みんなで育てる」ことができるかということが重要であると指摘している。そのため図司は「受け入れ地域と若者のマッチング」の探求のために、「若者の視点から地域サポート人材を志す目的や動機、そして任期中の展開、さらに任期後の動向について、相互を結びつけて検討する動態分析」の必要性を提唱している。¹

こうした先行研究の指摘を踏まえ本稿の具体的な課題は、どのような学習・教育課程を経ることで移住してきた若者が地域への愛着と住み続けようとする気持ちを形成し、さらに定住した後、地域の人たちと共に地域づくりに参加していくのかを明らかにすることである。

2. 対象と方法

本稿の検討の対象は、北海道新得町のレディースファームスクールである。新得町立レディースファームスクール(LFS)は平成8年に就農を目指す独身女性のための研修施設として開校された。実績を見ると、1期生から17期生まで長期研修生146名が修了し、平成25年4月現在、町内に残っている人40名(農業関係24名・結婚20名 ※重複あり)、道内で農家実習等39名(農業関係18名・結婚19名)となっている。この実績を見ても、レディースファームスクールの場合、研修終了後も新得町に住み続ける女性が40名となっており、一定の成果をあげていると言える。この意味で地域の担い手育成実践の研究対象となりえると思われる。

次に本稿の分析の視点について簡単に検討しておきたい。それをキーワードで表すと地域アイデンティティの形成である。この地域アイデンティティ形成は、移住してきた若者が地域の担い手になることにとって、以下の二重の意味を持っている。ひとつは、移住した若者の地域への定着に関わるもので、移住した若者の地域への愛着と住み続けようとする気持ちの形成である。これは移住してきた若者の地域へのアイデンティティ形成と言えるのではないだろうか。もうひとつが、地域のアイデンティティ形成と呼べるものであり、先行研究においては地域づくりとの関わりで論じられてきたものである。前者については比較的理解しやすいと思われるが、後者の地域のアイデンティティ形成とはどのようなことかについてはあまり一般的ではないかもしれない。

そこで次に、地域のアイデンティティ形成とはどのようなものか、そしてどのように論じられてきたかについて簡単に検討しておきたい。ここでは吉川まみ氏の「途上国における持続可能な地域づくりと環境教育・開発教育」²を取り上げたい。吉川氏が研究対象としたのは、途上国ドミニカ共和国の経済開発プロジェクトTURISOPPであった。このアプローチの特徴は地域住民の中に地域のアイデンティティを形成することを中核に据えていた。

このプロジェクトが地域のアイデンティティを形成するために行ったことは、第1に住民たち自身が地域を知るための自然・文化資源発掘であった。次に、それをもとに資源マップ作りを実施したという。さらに、官と民で構成された「地域力向上ユニットUMPC」をもとに、『地域の良いところさがしワークショップ』、『おらが村自慢大会』などを実施した³。そして最終的には「地域アイデンティティのテーマ化として『地域ブランドづくり』を行った」⁴のである。こうして、「地域の誇りや地域への思い、伝承などによってストーリー性を加えつつ、……この地域だからこそ商品やサービス、イベントなどが次々に企画・開発されていった」⁵のである。

こうした地域のアイデンティティ形成の特徴とは、『個人』のアイデンティティではなく集合体としての『場』の『地域アイデンティティ』⁶というところにある。次に吉川氏は、地域のアイデンティティ形成に関わる教育・学習の方法とその教育・学習によって得られる知識の性格について論じている。すなわち、地域のアイデンティティ形成においては「学校の教室の中で指導者として教師が、生徒たちに一方的に知識を教える」⁷という方法ではなく、体験・参加型の方法なのだという。そして吉川氏によれば、この学習から得られる知識は暗黙知と呼ばれるもので、そうした知識を「学ぶのはその体験と参加とに」⁸よらなければならないのである。

そして、この体験と参加による学びは、吉川氏によれば良好な人間関係の形成と仲間づくりそのものの学びであると論じている。すなわち、吉川氏によれば、「かかわりの存在としての私たち人間が現実に直面する事象を、練習ではなく自分の暮らしのリアリティある場で体験する」⁹ということは、「人々との良好な関係性を構築する力の育成そのもの」¹⁰なのである。こうした、学びの形を吉川氏は、学校の偏差値教育との比較で次のように論じてもいた。すなわち、偏差値教育においては、「友達と自分との関係性を、常に自分はあの子より上とか下という優劣の捉え方によってしか構築できず、結果として仲間意識は切れ切れになって」¹¹しまう。これに対し地域のアイデンティティ形成に関わる体験・参加型の学習・教育においては、「お互いの欠点を補完し合ったり互いに高め合ったりできるよう」¹²になっており、「横のつながりの強化に効果を発揮」¹³するようになっているというのである。

以上のような地域のアイデンティティ形成において参加した個々人の自己意識の面ではどのような変化が生じているものなのだろうか。吉川氏によれば地域のアイデンティティ形成に伴って、個々人においては「“地域で生きる自分”が、“地域に育まれた自分”、“地域で生かされている自分”へと自己認識を変化させている」¹⁴ものなのである。そうした自己認識の変化は、「自分たちの今が将来世代へのつながっていることへの自覚を促し、地域の環境の保全、改善などの環境配慮行動を内発的に生む契機となっている」¹⁵という。そうした、『地域アイデンティティの意識化』プロセスでは、……地域の何にコミットしたいのか、という自分自身の価値観と向き合うことに¹⁶なっていくというのである。そのことを換言すれば、個々の地域住民が地域社会における自己の社会的役割の自覚化と言えるのではないだろうか。

ここまでの検討を踏まえ、本稿では単に移住してきた若者の地域への定住だけを問題にするのではなく、定住後それらの若者たちが地域の一人として地域の人たちと共に地域づくりの担い手となっていく過程をも問題としたい。

この視点から言えば、地域へのアイデンティティ形成と地域のアイデンティティの関係性とは、まず地域へのアイデンティティ形成があって、次に地域のアイデンティティ形成があるというものではない。この関係は移住する若者とそれを受け入れる地域住民との関係でもあり、地域アイデンティティ形成において、まず重要となるのは移住してきた若者を受け入れる地域住民そのものがどのような地域アイデンティティ形成をしているのかということなのである。そのことと関わって移住してきた若者の地域へのアイデンティティ形成が行われるのである。本稿の検討対象となっている新得町に即して言えば、新得町においては基本的には規模拡大という方向で経済のグローバル化に対応してきた地域と言えるであろう。しかし現在、様々な意味でそうした方向性が揺らいでいる。すなわち、これまでの地域アイデンティティ形成の方向性も揺らいでいると言えるのである。特に、TPP と関連し厳しい外的環境に直面していた。さらに、内部的には後継者不足が深刻化していた。そうした状況の中で、新たに移住してくる若者たちがどのような地域へのアイデンティティ形成を行うのかが問われることになるものと思われる。

また、レディースファームスクールの場合は、地域へのアイデンティティ形成が集団的な性格を持っているという特質がある。すなわち、レディースファームスクールの場合、研修を修了した後の同窓生が自分たちの交流のためミルクネットという組織をつくっている。そして「まきばの乙女」という機関誌を発行している。新得町に残ったメンバーがその主要な担い手である。この機関誌は同窓生相互の交流だけでなく地域の人たちとの交流の役割を果たし、さらに同窓生たちの新得町に対する評価や想いを発信するものともなっている。そこで本稿では、この機関誌を取り上げ、レディースファームスクールの同窓生の新得町へのアイデンティティ形成と地域のアイデンティティ形成に果たす役割を検討したい。

3. 新得町の概況

(1) 農業生産の動向

まずレディースファームスクール生の地域へのアイデンティティ形成の土台となっている新得町の概要と地域課題について検討していきたい。ただその詳細な検討は、紙数の関係で行うことができない。農業生産と農業従事者の動向について簡単に検討することに留めたい。

北海道新得町は十勝の北西部にあり、北海道のほぼ中央に位置する。総面積 1063.79km² に 3,357 世帯 6,461 人（平成 25 年 11 月末現在）が暮らしている。それに対し、牛（肉用牛・乳用牛）は 33,000 頭以上飼育されており、酪農をはじめとした農業が盛んな町である。人口は昭和 30 年の 15,525 人をピークに、平成に入ると 9,000 人を下回りその後も減少傾向にある。逆に肉用牛・乳用牛の飼育

頭数はそれぞれ平成4年に8,474頭・5,923頭から平成23年の25,602頭・8,251頭と増加しており、これは農業の大規模経営が進められていることを示している。それは乳用牛の1戸あたりの飼育頭数が平成4年の60.40頭から平成23年には171.90頭に増加していることから見てとれる。

また、1次産業の中で畜産に次いで盛んな耕種は、牧草やデントコーンといった飼料作物を除くと、小麦(657)・てん菜(312)・そば(222)・馬鈴薯(180)（単位は作付面積ha・平成23年）の順に多い。中でもそばは新得町の特産の一つになっており、そば祭りが開催されるなど地域の振興にも貢献している。酪農と同様に大規模経営化が進んでいるようで、それは、1戸当りの経営耕地面積が平成4年の21.7haから平成23年の39.3haとなっていることから見てとれる。

次に、新得町における農家の数と専業農家と兼業農家の割合、そして営農区分ごとの農家数の確認をしておこう。農家数に関しては、平成5年には217戸あった農家は平成23年には123戸に減少している。また、平成5年には7割が専業農家であったが平成17年には6割になり、兼業農家が増加している。表1によって、営農区分別に見てみるとほとんどの分野で減少傾向にあるといえるが、近年に限定すると畑作農家は減少しているが、酪農農家はほぼ横ばいである。このことから、新得町における農家の変遷は全体的な農家数は減少傾向にあり、その中でも畑作は厳しい状況にあることが読み取れる。

表1 総農家数・営農区分の推移（単位：戸）

年次	総農家数	営農区分						
		畑作	野菜	酪畑	酪農	肉牛	育成	その他
H18	125	59	4	3	47	8	4	—
H19	121	53	4	2	47	12	3	—
H20	127	56	8	2	44	13	2	2
H21	127	55	8	2	45	13	2	2
H22	125	52	9	2	44	15	1	2
H23	123	48	10	2	45	14	1	3

それでは、農家数の減少とともに生産量も縮小していったのであろうか、表2・表3を参照すると、耕種の粗生産額は平成6年から平成23年までで7割ほどに減少している。しかし、畜産の粗生産額は同時期に3倍以上に増加している。加えて搾乳牛頭数および出荷乳量も増加していることから、新得町では耕種の生産は縮小し、畜産の生産は増加していることがわかる。

そしてその生産の増大は、1軒ごとの経営規模が拡大していることが要因となっている。また農業の大規模化は農業法人数の増加も1つの要因となっているであろう。平成17年には19の経営体であったが、平成22年には25の経営体にまで増加している。

以上のように新得町の農業は全体的に農家数が減少し縮小傾向にある。その中でも畑作は厳しい状況にあるといえよう。一方、畜産は農家数自体は減少しているが、規模の拡大という形で生産を

むしろ増加させてきたと言える。

表2 農業粗生産額

年次	粗生産額			1戸平均所得 千円	耕種割合 %
	耕種 百万円	畜産 百万円	計 百万円		
H6	2,170	3,116	5,286	7,790	41.1
H7	1,740	3,387	5,127	7,170	33.9
H8	1,584	3,546	5,130	7,660	30.9
H9	1,638	3,911	5,549	8,835	29.5
H10	1,818	4,094	5,912	10,117	30.8
H11	1,666	4,228	5,894	9,689	28.3
H12	1,580	4,630	6,210	13,064	25.4
H13	1,520	5,130	6,650	11,891	22.8
H14	1,730	5,790	7,520	12,904	23
H15	1,650	5,810	7,460	12,173	22.1
H16	1,770	6,310	8,080	14,769	21.9
H17	1,750	6,510	8,260	17,409	21.2
H18	1,282	7,535	8,817	—	14.5
H19	1,043	7,691	8,734	—	11.9
H20	1,272	8,819	10,091	—	12.6
H21	1,006	9,690	10,696	—	9.4
H22	964	10,053	11,017	—	8.7
H23	1,480	10,369	11,849	—	12.5

表3 牛乳出荷量

年次	牛乳集荷戸数	搾乳牛頭数	出荷乳量(t)
H6	74	2,964	20,901
H7	72	3,040	22,501
H8	69	3,284	24,456
H9	65	3,647	27,974
H10	61	3,774	30,206
H11	57	3,864	31,644
H12	54	3,767	31,522
H13	51	4,207	33,747
H14	51	4,498	38,019
H15	52	4,561	40,211
H16	51	4,641	41,110
H17	50	4,712	41,764
H18	49	4,448	40,902
H19	48	4,442	39,628
H20	47	4,531	41,255
H21	48	4,744	40,112
H22	47	4,745	44,779
H23	45	4,808	44,683

(2) 農業従事者数と後継者数の変化

上で新得町の農業がどのように変遷してきたのかを見てきたが、次に農業労働力の側面から新得町の状況を確認する。

表4より農業従事世帯員数の推移を見てみると、平成2年に687人いたのが、平成22年には4割以下の260人にまで減少してきている。しかし、上で確認した農家数の減少と照らしあわせて農家1戸当たりで見えてみると2.77人から2.6人とあまり変化が無いように見え

表4 農業従事者の推移(単位:人)

年次	農業従事世帯員数			1戸平均
	男	女	計	
H2	349	338	687	2.77
H5	299	286	585	2.7
H7	279	247	526	2.55
H10	234	220	454	2.56
H12	215	195	410	2.62
H22	146	114	260	2.6

るが、これは世帯員数であり、雇い入れた人員を考慮に入れていないためである。参考に2010年のデータを確認すると、雇い入れた実経営体数66経営体、実人数692人となっている。

また、図1の市町村別雇用マーケットを見ると、耕種で10.3日、畜産で23.9日、人員が不足していることがわかる。以上のことから新得町の農業労働力は農家1戸当りの人員数はほとんど変わらないものの、規模の拡大に伴い外部からの労働力を必要にするようになっていった。しかし、それでも労働力不足は新得町の農業において大きな問題の1つとなっているようである。

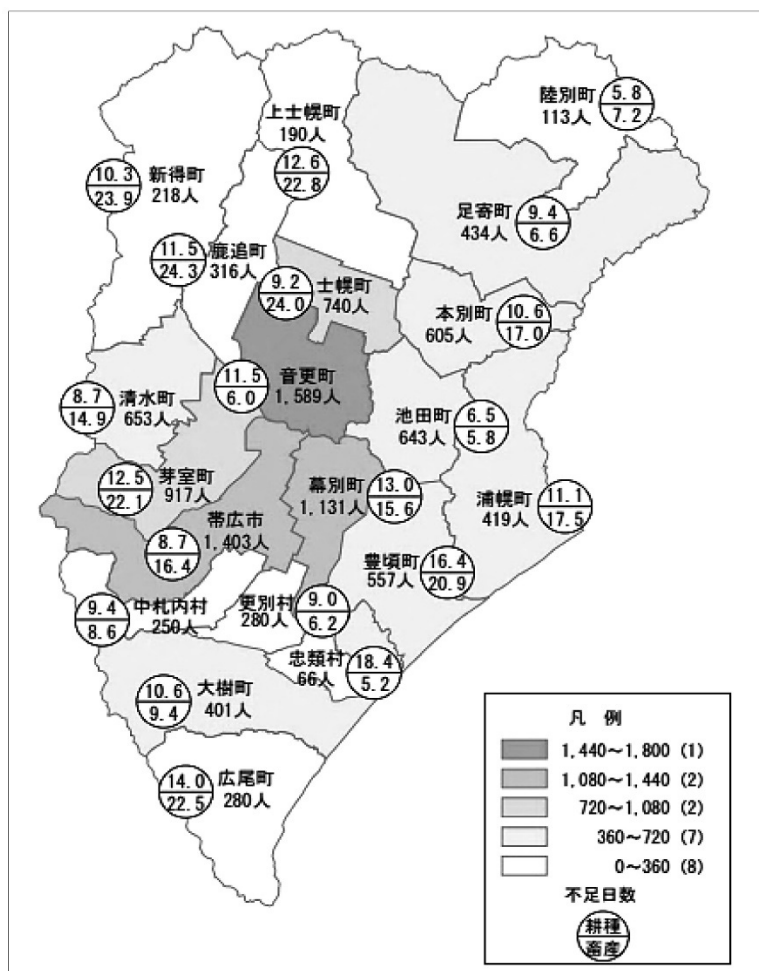


図1 市町村別雇用マーケット

次に、表5より後継者数の推移を見てみると、年々減少しており、労働力不足と合わせて新得町の農業において課題となっている。

表5 農業後継者数および後継者のいる農家数

年次	後継者数(人)			後継者のいる農家数(戸)		
	同居	他出	合計	同居	他出	合計
H2	79	13	92	—	—	—
H7	54	33	87	54	33	87
H12	30	10	40	30	10	40
H17	—	—	—	23	6	29

資料) 表1～表4：平成24年 調整一覧 資料編より作成

表5：1990年～2005年世界農林業センサス 第1巻 北海道統計書より作成

図1：十勝圏複合事務組合が実施した農村マーケティングリサーチ事業

4. 新得町立レディースファームスクールの概要およびミルクネットについて

新得町立レディースファームスクール(LFS)は平成8年8月2日に就農を目指す独身女性のための研修施設として開校された。スクールでは、酪農・畑作・肉牛での農家実習を主体として、農業関係機関による講義、農畜産物の加工実習、農業関連施設の視察などの研修を行っている。

平成25年4月現在、1期生から17期生まで長期研修生146名が修了し、町内に残っている人40名(農業関係24名・結婚20名 ※重複あり)、道内で農家実習等39名(農業関係18名・結婚19名)となっている。

すでに指摘したことではあるが、新得町のレディースファームスクールの事例において、地域へのアイデンティティ形成に関して重要となるのは、この地域へのアイデンティティ形成が研修生のそれぞれ個人的なものというのではなく、集団的形成という特質を持っているということである。ここでいう集団的とは何か。それは、単に研修生みんなが同じアイデンティティを持っているということではない。まず何よりも、修了後それぞれ進む道と住むところが違っても研修生時代には新得町の一員であったということを具体的・社会的に表現する組織を生み出したということである。それがミルクネット(OG会)である。次に集団的という意味は、新得町の一員へのアイデンティティを再確認する活動を続けていることである。それが「まきばの乙女」という会報の編集・刊行である。集団的という意味の3つめは、ただ単にその内容が修了生に関わるものだけではなく、地域住民の人たち(スクールに関わる人が主ではあるが)や新得町に関する出来事などが重視されていることである。この意味で集団的アイデンティティ形成の内実を検討することは、単に研修生のアイデンティティ形成の内実を検討のために重要なだけでなく、研修生を受け入れた地域住民の人にどのような変容が起きているかを検討する上でも、間接的ではあるが重要となるものである。

5. レディースファームスクールにおける研修生の地域アイデンティティの形成

ここではレディースファームスクールにおける研修過程とその研修終了後の新得町の住民になる

という研修生の移行過程に焦点を当て、研修生のアイデンティティ形成の検討を行う。

では、新得町の事例に即したアイデンティティ形成論はどのように考察したらよいのであろうか。すでに述べたように新得町のレディースファームスクールの事例においては、研修生が研修終了後新得町の一員となることが重要であった。この意味でまず何よりも研修生の新得町への愛着と新得町に住み続けようとする気持ちの形成、すなわち地域へのアイデンティティ形成を考察することが第一義的となる。しかし、本稿ではさらに地域のアイデンティティ形成の可能性を探究することを課題としている。

一般的に言えば、地域のアイデンティティ形成の担い手はレディースファームスクールの研修生だけではなく、新得町の住民全般に関わるものであろう。にもかかわらず、レディースファームスクールのOG会の機関誌である「まきばの乙女」を取り上げる本稿でどのような意味で地域のアイデンティティ形成の可能性を論じることが出来るのだろうか。それは研修生自身の研修終了後の職業生活に関わるアイデンティティ形成に着目することによって可能となると思われる。なぜならば、研修生個人の職業生活に関わるアイデンティティの形成は個人的な性格を持つものであるが、同時に研修生が属している地域社会の社会的課題と深く関わるものだからである。とりわけ、地域社会で生まれ育った者が地域への愛着を持ちながらも自分が就きたい仕事がないために地域外に流出し過疎的地域になっている新得町のような社会においてそう言えるのではないだろうか。

すなわち、研修生の職業に関するアイデンティティ形成におけるジレンマは、即地域社会が直面している諸課題につながっており、そしてそれらの諸課題を解決していこうとすると、それらの活動は、地域のアイデンティティ形成という性格をもつであろう。そこで、本稿においては、レディースファームスクール研修生たちが研修終了後さまざまなジレンマを抱えながら、自分たちの職業に関するアイデンティティを形成し、新得町に残ったなかで、新得町の地域課題をどのように認識し、今後どのように解決していこうとしているのかという視点で、「まきばの乙女」を読解していくことにしたい。

(1) ミルクネットの形成の経緯 — 仲間意識の形成との関わりで —

ミルクネットとはレディースファームスクール修了生の有志が組織している会であり、年に1回「まきばの乙女」という会報を発行している。内容は新得町の出来事・現研修生の紹介・スクール管理人や受入農家の近況・修了生の近況を主とし、加えてその時々々の時勢に応じたアンケートや記事が掲載されている。本稿で対象にするのは2013年12号までである。

ミルクネットは平成14年に発足した。それは「修了生が増えていく一方、修了生同士の交流を深める機会が少ない事から、同期以外の仲間との交流・情報交換ができる様にと発足した。また『まきばの乙女』の発行によって新得町を離れた方々に新得町の事を思い出してもらい、今の生活の励みになれば」という思いがあったからである。発足当時のメンバーは会長（1期生）、副会長（2期

生)、事務局長(4期生)、会計(3期生)が1名ずつと監査(1期生・5期生)2名、そして理事(1期生～5期生一名ずつ)5名で構成されていた。

この「まきばの乙女」という会報の編集に関わるメンバーは毎年同じではなく、様々な修了生が関わっており、会報を作っていく過程そのものがメンバー同士のつながりや今まであまり関わりの無かった地域住民とのつながりを深めていく機会となっている。

このようにミルクネットの活動そのものは、ほぼ年1回の会報の発行に限られ一見すると研修生にとって重要な意味を持たないかのようにも見えるが、実は後に検討するように第1に修了生相互のそして修了生と地域住民(特に受入農家)との仲間意識と絆を強めるうえで重要な役割を果たしていると思われるのである。なぜならば、会報は編集に携わる修了生がかなり長期にわたって、修了生相互および修了生と地域住民との連絡と情報交換を積み重ねる努力のもとで作られているからである。しかも、ある特定の決まった人が編集に携わるのではなく、常に後輩の修了生も新たに巻き込んで編集作業が行われているのである。すなわち、編集作業それ自体が、毎年しかも繰り返し修了生同士・修了生と研修生・修了生と地域住民との絆を強める機会となっているように思われる。

それは、編集された内容に反映されていると思われる。それゆえに、会報の内容を分析ことでレディースファームスクールの研修生および修了生の新得町に対するアイデンティティ形成、研修生および修了生同士・研修生および修了生と受入農家を中心とするスクール関係者との間のアイデンティティ形成の集団的な形成が分析できるものと思われる。

会報の内容を①新得町の受入農家および新得町に関わる記事②研修生・修了生の近況報告③その他に分けて一覧に整理したものが以下の表6である。

表6 会報の内容

	新得町の受入農家および新得町に関わる記事	研修生・修了生の近況報告	その他
2002		修了生近況報告	町長の言葉、協議会会長の言葉
2003	牧場紹介	修了生近況報告	
2004	アンケート(総会や交流会、ミルクネットについて)、牧場紹介、受入農家近況報告、新規研修生の紹介、役場担当者の方へのインタビュー	修了生近況報告	
2005	LFS10周年記念交流会の紹介、アンケート(スクール時代思い出に残っていること)	修了生近況報告	
2006	新規研修生の紹介、新得ニュース、アンケート(新得町のここが好き・嫌い)	町外で新規就農を果たした修了生の紹介、酪農後継者の紹介、修了生近況報告	
2007	新規研修生の紹介、LFS 管理人の紹介、新得ニュース、アンケート(食について考えよう ex) 食の安全・国産食品へのこだわり・EPA)	修了生近況報告、町外で就農した修了生の紹介、アンケート(農家の奥様に聞きました)	

2008	新規研修生の紹介、新得ニュース、アンケート（エコについて・十勝の好きなおとこ）、新しい店の紹介、受入農家の近況報告と我が家の自慢	修了生近況報告	
2009	新規研修生の紹介、新得ニュース、受入農家の近況報告、研修生実習先の農場紹介、アンケート（牛乳について）、牛乳レシピの紹介	修了生近況報告、町外で新規就農を果たした修了生の紹介	
2010	新規研修生の紹介、新得ニュース、LFS15年のアルバム、新規研修先の紹介	修了生近況報告	前副校長（前助役）の近況報告と一言
2011	新規研修生の紹介、新得ニュース、受入農家の近況報告、フリートーク	修了生近況報告	
2012	新規研修生の紹介、新得ニュース、アンケート（北海道グルメ）、出身地のおすすめ名物、新規研修先の紹介、受入農家の近況報告	修了生近況報告	
2013	新規研修生の紹介、新得ニュース、歴代管理人の近況報告、受入農家の近況報告、汚染牧草について	修了生近況報告	

そこで以下、「まきばの乙女」に掲載されている上記に関わる内容を検討項目に沿って抽出することによって、そのアイデンティティ形成の内実を明らかにしていこうと思う。そのはじめとして会報の編集に携わった人たちがその活動をどのように感じたのかを編集後記の記述を手掛かりにして確認しておきたい。

そこには、他の人と協力しながら編集作業をすること自体が、仲間意識を強める機会となったということや、編集作業そのものが修了生や新得町の農家との新たな交流の機会となっているということ。さらに、新得町外に移った人もこの会報の編集があることによって新得町を再び訪れ、仲間との交流をすることが出来ていることを示す記述が見られた。

最後に、修了生の近況報告が会報の内容の大きな柱の一つになっていることに会報の交流と仲間づくりとしての意味付けの大きさが現われているのではないだろうか。この近況報告はどの号でも必ず大きな重みをもって掲載されているのである。さらに、研修生・修了生相互の仲間づくりとしての意味として重要と思われるのは、ほぼ毎号新規に入校した研修生の紹介記事を掲載していることである。それは、自分たちの仲間が新たに加わったということを表現する記事となっているのではないだろうか。

(2) 新得町社会へのアイデンティティ形成

会報の内容を一覧にした表6を見ても分かるように、会報の大きな柱の一つは受入農家を中心とする新得町に関わる紹介記事である。ここに修了生たちの受入農家および新得町に対する並々なら

ぬ関心の所在を見てとれるのではないだろうか。言い換えれば、会報そのものが修了生の受入農家および新得町に対する愛着を表現しているものと思われる。

その内容は3つの項目に分けることができる。第1が文字通りレディースファームスクールに関わる関係者の近況報告である。第2に新得町の出来事に関わる紹介記事である。第3にこれからの地域社会および生活のあり方に対して提言していると思われる内容についてである。

では具体的に第1の項目から見ていこう。受入農家の近況報告は2004年にはじめて登場し、2008年以降はほぼ毎号紹介されている。その全てについてはとても紹介しきれない分量である。そこで2004年の近況報告を参照し、それがどのように紹介されているかについて見てみようと思う。2004年の近況報告は15の牧場から寄せられているが、その中から01牧場とY1牧場を取り上げ参照することにしたい。

01牧場「レディースさんが初めて我家に来てくれたのは、平成10年に親方が農作業事故に遭い、大変だった時でした。あの時はとても助かりました。あれから6年。親方も元気になり、ガンバっています。最近、次男の野球の応援と仕事と忙しそうです。そして当時中2だった長男は、今では農大の2年生で勉強にバイトにと多忙な毎日の様で、休みでもあまり家には帰ってきません。次男は小6から始めた野球に夢中で中3になった今キャプテンとして、18名の部員を率いて最後の夏に向けて頑張っています。じいちゃんもばあちゃんもそれぞれ元気で、自分の好きな事をしています。最後に私ですが、毎日相変わらず牛舎で牛母さん達と過ごしています。〇〇ちゃん、△△さん、□□ちゃん、みんな元気ですか？たまには顔を見せて下さい」

Y1牧場「皆さんこんにちは。Y1牧場は今春より4年目に入り、お陰様で順調に経過しております。当Y1家は昨年9月に息子が結婚し、今年12月に私もおばあちゃんになれそうです。ウレシー！今から心が踊っています。我家に来てくれた〇〇ちゃん、△△さん、□□ちゃん、…今思い返すと楽しい思い出が一杯です。皆それぞれの道で活躍されていて、とても頼もしいです。お互い元気で頑張りましょうね。人生はいつも『これから』です。今を楽しく！」

この2つの受入農家の近況報告を見てわかるのは、2004年の近況報告の形式が、受入農家の修了生に対するメッセージとなっていることである。そうした形式をとったことによるのかもしれないが、受入農家の研修生に対する懐かしさと愛着が表現されているものになっている。また、その内容は修了生が研修時にかに受入農家の人たちと家族ぐるみの交流をしていたかを読み取れる内容になっているのではなかろうか。ここにレディースファームスクールの受入農家と研修生との間の関係性が表現されているように思われる。また、受入農家の中での研修生の学びが牧場の人たちと共に共同作業する中で学ぶ形をとっていたことを示しているように思われる。そうした中で、修了生の受入農家に対する気持ちはこの近況報告からは直接読み取ることはできないが、受入農家が修了生たちに示しているものと同じような懐かしさと愛着を持っているのではなかろうかということも推測できるようなものになっていると思われる。

以上の2004年の近況報告について見ただけでも、受入農家と研修生の交流の性格とは、教師の立場として研修生に対して農業技術を伝達するだけではなくて、研修期間に同じ農作業を共にする仲間として相互交流するものであるということが読み取れる。すなわち、新得町のレディースファームスクールにおける学習過程とはただ単に研修生だけの学習過程というのではなくて、受入農家と研修生がともに共同作業しながら相互交流している、言い換えれば研修生と受入農家相互の農業に対する姿勢や農業のやり方について相互に学習している過程であることが読み取れる。そしてさらに言えば、そうした研修生と受け入れ農家相互の交流と相互学習は研修生の新得町への愛着の原動力となっていることをまさしく示していると言えるのではないだろうか。

次に第2の項目について見ていこう。新得町に関する紹介記事は2006年以降「新得ニュース」という表題の下で毎号掲載されている。その内容を分析すると、編集者の目から見た新得町の動きを紹介するものとなっている。その内容は町村合併など町全体に関わることから一つの牧場の出来事を紹介するものまで非常に多岐にわたっている。しかも会報を編集している過去1年の間新得町で起こった出来事が編集者の目によって選び出されているのである。そのためこの新得ニュースを見ることで修了生の新得町に対する関心の在りどころが読み取れるのではないであろうか。では、修了生は新得町のどのような出来事に関心を持っているのであろうか。

例えば、かくし芸大会・収穫祭・綱引き大会など研修生時代にスクール生として参加していた行事が紹介されている。これはスクール生時代の思い出としてのまなざしで選ばれている者のように思える。また新得かあちゃん市・駅前マルシェなど新得町の農家の人の地域活性化に関わるような出来事が紹介されている。ここにも修了生たちの新得町を活性化したいという想いが見てとれるのではないであろうか。さらに、図書館の30周年・町営プール10周年・神社の移転・こどもセンターオープンなど町の施設に関する出来事も紹介されている。また、全町教育やコミュニティバスの運行などの町の施策に関わるものも紹介されている。これらは修了生が新得町の生活者の目で選んだニュースのように思える。さらに新得町の将来に関わる地域課題に関する出来事も紹介されている。例えば、日豪EPAやTPP、町村合併問題などがそれである。

次に第3の項目について見ていこう。この内容については毎号掲載されているわけではないが、女性の目から見た新得町の生産・生活上の課題を提言するような内容となっている。例えば2007年の会報には「食について考えよう」と題し、食の安全に対する意識調査をはじめ、国産食品へのこだわり、EPAの解説、食料自給率低下に対する自分たちができることなどを特集している。また、エコに関してOGが実践していることを紹介したり、牛乳を使ったレシピを募集し紹介するなどの記事が掲載されている。

以上みてきたように、会報の中では新得町の生産・生活上の課題についていかに強い関心を抱いているのかが示されているといえよう。そのことの意味することは、まさしく地域の課題を自らのものとしている現れではないであろうか。さらにこのことは、単に修了生の新得町社会へのアイデ

ンティティの重要な要素となっているだけでなく、地域のアイデンティティ形成のための重要な要素ともなっていると思われるのである。なぜならば、特に上記の第2と第3の項目に関する諸記事は、地域課題の共有化と新得町社会がこうあってほしいという修了生の想いが表現されたものとなっているからである。そうした想いが地域住民にも共有されるとき、それはまさしく地域のアイデンティティ形成の内実となりうるようなものなのではないだろうか。

そこで次に、この地域のアイデンティティ形成につながりうるものを明確化するために、牧場の乙女が持つ研修生・修了生・地域住民の相互学習的性格を剔出する作業を行うことにしたい。

(3) 新得町における地域のアイデンティティ形成

1) 研修生相互の学習の形成

ミルクネットの会報を発行するという活動はただ単に同窓生の交流という意味を超えて、レディースファームスクールの後に続く後輩たちが自己の地域へのアイデンティティを形成するための大切な情報源および学びの場ともなっているのである。それは、後に続く後輩たちがどのように新得町に住み農業に携わるのかについて示唆するような記事が掲載されていることから読み取れる。

新得町に残り農業に携わる形として考えられるのは、これまでの実績を踏まえると以下の3つに分けることができよう。それは経営者として自立する・農家の男性と結婚する・従業員になるという形である。

経営者として自立しようとする者に対しては、新得町で新規就農を果たした修了生Nさんを紹介した記事がある。それは「N牧場のすべて」と題して、Nさんが日々どのように仕事をしているかについて、Nさんの日々の気持ちを文章にして紹介している。その最後にインタビューを担当した修了生はその記事を次のようにまとめていた。

「まあ、こんな感じで楽しく淡々と日々の生活を送っている牧場主なのでした。細かいことは直接やって来て直接聞いてください」(2004年3号)。この最後のまとめにもあるように経営者として自立した修了生がどのような生活を送っているかを紹介しつつ、後に続く人たちに対して、何かあったらN牧場に来て話を聞いたらよいというメッセージを送っているのである。

次に新得町で新規就農は目指さないが、何らかの形で農業に携わりたいと考える研修生にとって、農家の男性と結婚し農業に携わっていくという道は選択肢として有力なもの1つとなっている。研修生にとっても、具体的に農家の嫁として農業に携わるといことがどのようなものなのかということに関心の高いものであろう。そのような声に応えるような形で、「農家の奥様17人に聞きました！」と題して特集が組まれていた。

さらに、新規就農・農家に嫁ぐという選択肢の他に新得町で農業に携わっていく道として、農家や農業法人の従業員として働くというものがある。これに関しては特別に特集を組んで紹介するというものはないが、修了生近況報告・受入農家近況報告・研修先紹介などの中で従業員として修了

生が共に働いているということが紹介されている。また、修了生の近況報告には、農家以外で農業に関係する機関や会社で働いている姿も報告されていた。

以上のように新得町における3つの農業に携わる形に関して、先輩たちの事例や情報に関する記事が掲載されているのである。このことは後に続く者がどのような形で農業に携わっていくかの選択に対して大きな影響を与えているのではないであろうか。そのことはレディースファームスクール修了後の研修生の動向を見てみると、道外へ出て行ってしまいう修了生の割合が減り、道内に残る修了生の割合が高まっていることに示されているように思われる。

以上のように研修生が研修終了後、どうしたら新得町に住み続けることが出来るようになるのかということは、研修生にとって大きな関心事だったのである。しかし、この課題は単に研修生だけの課題ではなく、新得町自身にとっても重要な地域課題なのではないだろうか。なぜならば、若者が新得町で生活し活躍できるような地域社会をつくることこそが人口を維持し産業を発展させていく原動力となるからである。

2) 地域住民と研修生の相互学習の形成 —主として研修生に対する地域住民のまなざしに注目して—

はじめに、地域住民と研修生の相互学習とはどのようなことかについて簡単に述べておかなければならない。1)で見てきたようにスクール生同士の相互学習とは修了後どのような形で農業に携わるかということに関わるものであった。では、地域住民と研修生との相互学習とはどのようなものになるのであろうか。とりわけ住民の側が研修生・修了生から学ぶとはどのようなことなのであろうか。結論から言えば、地域住民の学習とは、住民の側がスクール生を共に農業をする仲間としてまた、共に同じ地域社会をつくる仲間として認知し、実際にも協力し合いながら農業に携わり地域社会づくりをするようになっていくということである。ここでは、そのことを会報に加え、受入農家で作るレディースファームスクール協議会会長のOさんへのインタビューを素材として検討することにしたい。

地域住民のスクール生に対するまなざしを検討してみると、まず何よりも感謝の気持ちを感じているようである。それは、研修生が自分たちの農作業の手助けてとなっていることに対して、また地域の様々なイベント・行事に参加し地域を元気づけてくれていることに対してである。

会報の受入農家近況報告の中では、「研修生の力は、毎年大いに役立っています」ということや、今は離農した方も「皆さん方にお世話になった当時の事が懐かしく思い出されます」など感謝の気持ちを表す言葉が数多く見られる。レディースファームスクール協議会会長のOさんは、「行事の存続にスクール生が欠かせない、スクール生がいないと寂しい」「地域は学校を中心に広がっていて、学校がなくなるとダメになってしまう。地域の学校が閉校になりコミュニティが小さくなっていくところを、今はレディースファームスクールがその替わりとなっている」と語ってくれている。また、レディースファームスクールが主催している収穫祭の時は地域の人が集まる機会となり、研修

生・地域住民の交流の場ともなっているのである。

次に住民のスクール生に対するまなざしを検討して明らかになったもう一つの点は、スクール生の農業に対する気持ちが本気であり、受入農家の側もその気持ちに対して生半可な気持ちではなく本気に向き合わなければならないということを強く意識してきたということである。0さんはスクール当初の研修生の印象を次の様に語っている。「スクールに来る女の子は1年や2年で帰る気では来ていない。一言で言うと『すわってる』。研修生に『半端で来てない』と言われ、こっちがドキッとす」。このような研修生の農業に対する真剣さを受け、スクール生を受け入れ教える立場の農家の方もその気持ちに込めるようになっていったのであろう。

最後に修了生たちと共に農作業や地域生活を送る中で、修了生たちの農業者としてまたは地域の一人としての必要性を認めるまでになってきたことである。0さんは、「ある牧場はOGが4,5人いて、OGが残っていなかったら経営も厳しかった」と地域の農家が経営を継続していく際にスクール修了生は欠かせない存在だと認識しているようであった。また、「女性の役割がすごい、真面目なのかな」と評しており、新得町にとって女性が農家で働くということが浸透している様子が伺える。

6. まとめ

ここまでレディースファームスクール生の新得町社会に対するアイデンティティ形成を検討してきた。その際のキーワードは新得町への集団的アイデンティティの形成ということであった。同時にレディースファームスクール生の新得町社会への集団的アイデンティティ形成の事例は地域のアイデンティティ形成にもつながる可能性をもっているものでもあった。というのは、上記の集団的アイデンティティ形成過程は修了生を含めたスクール生相互だけでなく、スクール生と地域住民の人たちとの相互学習過程でもあったからである。そして、そのスクール生と地域住民との相互学習過程の性格とは、上記で参照してきた吉川氏の地域のアイデンティティ形成の柱の一つであった仲間づくりという性格そのものを示していたのである。

すなわち吉川氏は、地域のアイデンティティ形成過程における教える者と教えられる者との関係について対等で相互支援的な性格を有しているということを強調していたのである。そのことは地域のアイデンティティ形成を論じる際の重要な指摘であるので、ここでその議論を再掲しておきたい。吉川氏によれば、地域のアイデンティティ形成に関わる体験・参加型の学習・教育においては、教える者と教えられる者との関係とは「お互いの欠点を補完し合ったり互いに高め合ったりできるよう」¹⁷ になっており、「横のつながりの強化に効果を発揮」¹⁸ するようになっていなければならないのである。吉川氏の指摘は、まさしく新得町のレディースファームスクール生の集団的アイデンティティ形成過程におけるスクール生と地域住民との相互学習過程の性格を言い表しているものなのではないだろうか。

そして、この仲間関係づくりは、新得町における新たな産業のあり方や社会像の探求と地域住民

による共有化という地域のアイデンティティ形成の土台となるであろう。

参考文献

-
- ¹ 図司直也「農山村地域に向かう若者移住の広がり」と持続性に関する一考察―地域サポート人材策に求められる視点―」（法政大学『現代福祉研究』第13号、2013）
 - ² 吉川まみ「第6章 途上国における持続可能な地域づくりと環境教育・開発教育―ドミニカ共和国におけるJICAプロジェクト『TURISOPP』をもとに」（鈴木敏正他編著・監修『環境教育と開発教育 実践的統一への展望：ポスト2015のESDへ』筑波書房、2014、所収）
 - ³ 同上
 - ⁴ 同上
 - ⁵ 同上、p118
 - ⁶ 同上、p121
 - ⁷ 鈴木敏正他編著・監修、前掲書、p124
 - ⁸ 同上、p125
 - ⁹ 同上
 - ¹⁰ 同上
 - ¹¹ 同上、p126
 - ¹² 同上
 - ¹³ 同上
 - ¹⁴ 同上、p123
 - ¹⁵ 同上
 - ¹⁶ 同上
 - ¹⁷ 同上
 - ¹⁸ 同上